

B-6

日英語母語話者の事態の描き方の違いは事態の捉え方の違いの反映といえるか

伊藤 創

各言語には、事態の描き方に関して好まれる「型」があることは古くから指摘されている。この事態描写の「型」とは、同じ事態を描く際にも、それをどういう観点から捉え、その中のどの情報を詳しく描くか、また同じ情報を言語のどの部分で表現するのか、などの傾向のことであり、それらが、言語によって大きく異なるのである。

例えば、日英語における事態描写の「型」の違いについては、日本語は主観（主体）的な事態把握（subjective construal）に基づいた描写を好み、英語は客観的な事態把握（objective construal）に基づいた描写を好むという池上（1981）の指摘が、近年特に注目され、また多くの研究によってその有効性を支持されているものと思われる（森田 1989、金谷 2004、中村 2004、守屋 2010 など）。

日本語で好まれるとされる主観的な事態把握とは、「自らの身をその事態の中に置くというスタンス（池上・上原・本多 2005：514）」で事態を捉えることであり、一方、英語で好まれる客観的な事態把握とは、「自らの身をその事態の外に置くというスタンス（同：514）」による事態把握をいうが、この指摘の重要性は、各言語には好まれる表現の「型」が存在するという〈言語〉レベルでの現象を捉えるにとどまらず、それを事態把握のあり方という言語表現に先立つ〈認識〉のレベルに押し上げ、この使用頻度の差に説明を与えようとしていることにある¹。これはすなわち、認識にも好まれる「型」が存在するということであり、このことによって、様々な言語表現のあり方の言語間の違いにも、事態把握のあり方という観点から統一的な説明を与えられる可能性が示されたのである。

例えば、同じ事態であっても、日本語では、自動詞や受動態を用いて描くことが多いのに対し、英語では他動詞を用いて能動態で描写する傾向があったり、過去の事態を描写する際に、日本語では相対テンスを用いて表現するのに対し、英語では絶対テンスを用いる、といった個別の表現方法の違いが、日本語は主観（主体）的な事態把握に基づいた描写を好み、英語は客観的な事態把握に基づいた描写を好むという事態把握のあり方という認識レベルの特性の違いから、統一的に説明される可能性があるのである。

しかしながら、ここで注意しなければならない点は、これはあくまで、日本語では主観的な事態把握に基づいて描写しているように「見える」表現が多く、英語では客観的な事態把握に基づいているように「見える」表現が多い、という言語現象から帰納的に事態把握のあり方を推論しているということである。すなわち、日本語母語話者、英語母語話者が、それぞれ主観的、あるいは客観的な事態把握をしているように見えるのは、あくまで「言語的なレベル」においての話であり、「認識のレベル」での事態把握のあり方については、あくまで言語現象からそのように推論されるだけなのである。

筆者は、この点に鑑み、伊藤（2015）において、主観的・客観的事態把握に基づいているように見える言語表現の中には、当該の言語の特性によって必然的にそういう形式になっている、

¹ 「〈事態把握〉とは、人が言語化に先立って「事態」を各言語の母語話者に応じたやり方で行うと考えられる認知的な営みを指す。言語の話者によって好む仕方が異なるものであり、言語形式の選択にも大きく関わっている（守屋 2010:29 下線筆者）」

いわば「副産物」的なものもあるのではないかと、いう可能性を指摘した。そして本研究においても、事態描写の「型」の違いが、事態認識の「型」の違いによる反映である可能性、あるいは、事態認識のあり方ではなく、当該の言語の特性の違いの反映である可能性、いずれもありうることを踏まえ、特に事態描写の「型」の中でも、〈事態のどの参与者に焦点を当てて描くか〉について、日英語を対照し、事態認識のあり方の違いの有無を確かめるべく、実証研究を行った。

この実証研究は、伊藤 (2016) で明らかにした下記のような日英語母語話者の事態描写の「型」の違いを元に行っている。伊藤 (2016) では、以下の図 1 のような、動作を働きかける側で、Action chain の始点に当たる参与者と、その動作の受け手で Action chain の 2 番目となる参与者（前者の参与者を「Agent」、後者の参与者を「Patient」と呼ぶ²⁾）の二つが存在する画像 27 枚を用意し、日英語の母語話者に画像に描かれた事態を自由に描写してもらった³⁾。

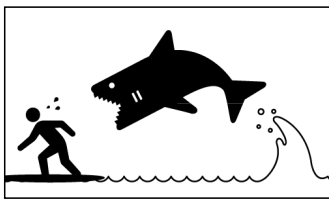


図 1

そして、その描写を、下記のように、1) Agent を主語として描いているもの（「Agent focus」）、2) Patient を主語とし、その参与者を〈動作主〉として描いているもの（「Patient focus 1」）、3) Patient を主語とし、それを〈被動作主〉として描いているもの（「Patient focus 2」）、4) その他（「others」）、に分類し、それぞれの描写の割合を比較した（英語の others の例は省略）。

- (1) a. サメが人間を食べようとしています。(Agent focus)
- b. サーフィン中にサメと遭遇してしまった。(Patient focus 1)
- c. おとこのひとがサメに食われそうになっている。(Patient focus 2)
- d. 襲ってくる鯨と逃げる人。(others)
- e. まさかの展開。(others)
- (2) a. A shark jumps from the water to attack a drunken man on the shore. (Agent focus)
- b. The surfer tries to flee as fast as he can. (Patient focus 1)
- c. A guy's about to get eaten by a shark. (Patient focus 2)

(伊藤 2016:15)

下記が図 1 についての日英語母語話者の描写の割合である（「その他」は除く）が、英語母語話者は圧倒的に〈鯨〉に焦点をあてた Agent focus の描写が多いのに対し、日本語母語話者は、〈人〉に焦点をあてた Patient focus 1、Patient focus 2 の描写が多い。

²⁾ 「Agent」「Patient」という用語は、それぞれ、〈action chain の始点にあたる参与者〉、〈Action Chain の 2 番目にあたる参与者〉という意味で用いる。例えば、図 1 において、「男性が鯨から逃げている」という描写をした場合、「男性」が動作主 (agent) なのであるが、そのような意味役割的な意味では用いない。

³⁾ 被験者は、日本語母語話者 62 名、英語母語話者 54 名。

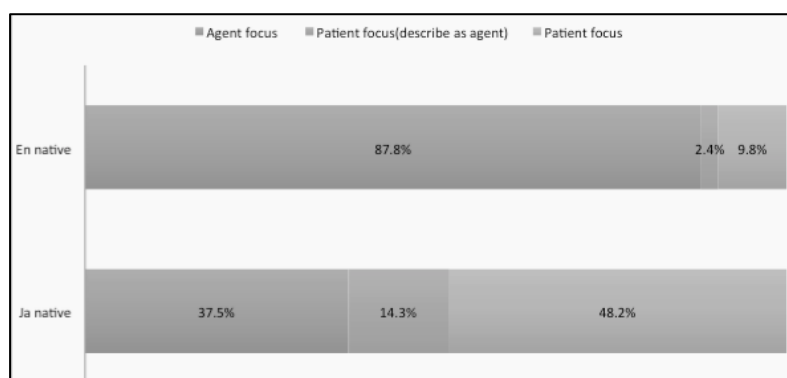


図 2 ($\chi^2(2) = 24.728, p < 0.01$)

さらに同調査で用いた 27 枚の画像のうち、各言語の描写のタイプの割合の差が有意であると判断されたものも、多くが図 2 と同じような割合を示した（伊藤 2016）。

このように、英語母語話者と日本語母語話者の間には、前者は、働きかけを行う側の参与者を主語に立てる傾向が強いのにに対し、後者は、働きかけを受ける側の参与者を主語に立てる傾向が強いという、事態描写の「型」の違いが見られるが、ここから事態把握の「型」を推測すると、英語母語話者は働きかけを行う側により焦点をあてて捉え、日本語母語話者は、働きかけを受ける側の参与側により焦点を当てて捉える傾向があると考えられる。

本研究では、このような〈描き方〉の違いが、事態の〈捉え方〉の違いに根ざしているのかを検証するため、日英語母語話者の描写のタイプの割合に優位な差がみられた図 1 のような画像 15 枚⁵について、描かれている事態の〈次〉に起こった事態を自由に想像して描かせる調査を行った（英語母語話者が 32 名、日本語母語話者が 26 名）。例えば、図 1 の事態を、「動作の働きかけ手」である〈鮫〉に焦点を当てて捉えているなら、次の事態を想像した際にも、（3）のような「鮫」についての描写が多く、逆に動作の受け手である〈逃げる人〉に焦点を当てて捉えている場合であれば、（4）のような描写が多くなることが予想される（いずれも実際に調査で得られた描写例）。

- （3） a. サメが地面に激突する。
 b. サメのジャンプがわずかに届かず、サメの頭を陸に打ち付ける。
 c. The shark will bite the man who is trying to run away.
 d. The shark latches on to the man's arm and slides slowly back into the water, dragging him under.
- （4） a. 男性のサーフボードがサメに食いちぎられましたが、命は助かりました。
 b. 鮫を殴り返して返り討ちに。
 c. The man will get eaten by the shark.
 d. The man will outrun the shark just in time.

⁴働きかけを受ける側の参与者は、伊藤（2016）では「共感しやすい参与者」として解釈できる可能性を指摘している。

⁵有意な差が見られたもののうち、差が大きいもの、また働きかけ手や受け手の属性（人、動物）や、事態の属性（negative な事態、positive な事態）などのバランスをとり、15 枚を選択した。

今回の調査では、動作の働きかけ手、受け手のいずれを主語に立て描いているかのみに注目し、前者の場合は、「Agent Focus」、後者の場合は、「Patient Focus」として分類したが、それら二つの描写の割合を日英語母語話者で比較してみると、下記のように両者には、有意な差は見られなかった。

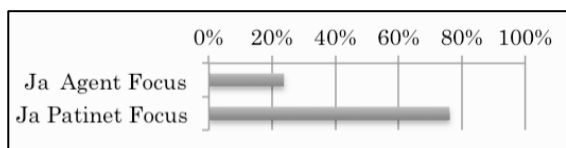


図 3

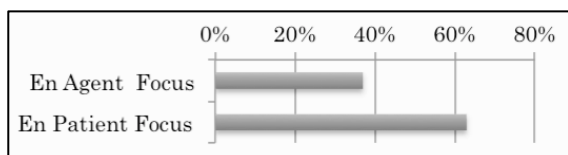


図 4 ($\chi^2(1) = 0.962, N.S$)

他の画像についても、英語母語話者と日本語母語話者の描写のタイプの割合の間には、有意な差はほとんど見られず、描かれた事態の描写の際には見られた、英語母語話者は動作の働きかけを行う参加者を主語に、日本語母語話者は働きかけを受ける参加者を主語に立てるという大きな傾向差は確認されなかった。

もちろん、次の事態を描写した際に、当該の事態の中で焦点を当てて捉えている参加者についての描写が多くなるという前提そのものの妥当性を検討する必要もあり、また当該の事態を描いた際のデータ量に比べて今回の調査の被験者は十分な数とは言えないかもしれない。そのような意味でさらなる調査の改良、拡大が必要ではあるが、本発表では、この調査結果から、日英語母語話者の間で事態の〈描き方〉には大きな傾向差が見られるものの、それが必ずしも両言語話者の事態の〈捉え方〉の違いに根ざしたものではない可能性があることを示し、特定の言語表現の多寡や、用いる表現形式の違いといった事態描写のあり方から事態把握のあり方を捉えようとする際には、そこには異なった形での検証が必要であるということを指摘したい。

【参考文献】

- 池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
- 森田良行（1989）『日本人の発想、日本語の表現-「私」の立場がことばを決める』中央公論社
- 金谷武洋（2004）『日本語にも主語はなかった』講談社選書メチエ
- 中村芳久（2004）「主観性の言語学-主観性と文法構造・構文」中村芳久(編)『認知文法論Ⅱ』大修館
- 守屋三千代（2010）「広告における受益可能表現-＜事態把握＞の観点より-」『創価大学日本語日本文学』21, pp.19-32
- 池上嘉彦・上原聡・本多啓（2005）「Subjective Construal とは何か」『日本認知言語学会論文集』5, pp.514-557
- 伊藤（2016）「日本語・中国語・英語母語話者における事態参加者焦点化の決定要因の差異」関西国際大学研究紀要 17, pp.11-22,